6．書　評

「10年後に食える仕事 食えない仕事」



著者：渡邉　正裕
出版：東洋経済新報社
発行：2020年２月28日

「人間が行う仕事の約半分がAI（人工知能）やロボット等が代替し、人間の働く場所が奪われていく」という話を耳にして久しい。2013年に英オックスフォード大学の、マイケル・A・オズボーン准教授らが著した論文「雇用の未来」で、「10～20年以内に労働人口の47％が機械に代替されるリスクがある」と表明されたことをきっかけに、AI脅威論が話題となった。本書は、AIのできることとできないことを明確にし、10年後の職業の変化について述べたものである。日本人の仕事がどう変わるのか、その全体像をわかりやすく描き、個々人が「人間ならではの強み」をどう生かしていけばよりよい職業人生が送れるのかを示すことを目的としている。今後仕事のあり方に変革をもたらす主要な要因は「グローバル化（外国人との競争）」と「テクノロジー進化（IT,AI）」の２つであり、この両者が「人口動態の変化（長寿化、少子高齢化、日本人減少）」というベースの上で、政府による政策の影響を受けスピードを増減させつつ、職業の形を変えていく。

テクノロジー進化による職業の未来を、５つに分かれるAIの影響から、①「手先ジョブ」エリアの職業群、②「職人プレミアム」エリアの職業群、③「デジタル・ケンタウロス」エリアの職業群、④「ロボティクス失業」エリアの職業群、⑤「AI・ブロックチェーン失業」エリアの職業群の５つのカテゴリに分類し、それぞれのカテゴリの特徴と、それに該当する職業の分析が非常に興味深い。オズボーン氏の論文にある職業は、外国独特の職業なども含まれているが、本書では、日本ならではの事情を考慮された「日本人の仕事」に対する将来予測なので、より現実味がある。また、機械に仕事を奪われないために必要な人間の強みは、創造、感情、信用、手先、ボディの５つ。これが今後の生き残るポイントであると述べている。

ひとつ「学校教師のマスプロ授業はAI代替へ」の項を紹介したい。教師の仕事の中核業務である授業は、一斉に同じペースで「個々の能力・才能を無視した規格大量生産的な教育」である。民間の某予備校でのデジタル情報化された衛星授業コンテンツの方が、目的合理性が高い。そこの生徒は、トップクラス講師による最高に面白くて分りやすいデジタル教材の授業を、自分のペースで受け、受験で成功体験を持つ大学生等が担任助手としてサポートする体制で成果を上げている。

そこで、成績上位者に対しては、答えが存在する偏差値教育（偏差値を上げるための授業）の時間を学習効率の高いAIやネットのデジタル教材に任せ、捻出された時間を、人間の教師にしか出来ない本来の教育（「生きる力」を育む等）、そして自学自習できない「ボトム生徒」のモチベーションアップと個別サポートに充てる。さらに部活顧問も地域に移管することで、教師の「やりがい搾取」のブラック労働環境を解消し、限られた教師の時間を最大限有効活用しなければならないと説いている。

学校は全ての教育活動を通して、生徒一人一人の知識・技能、豊かな人間性を育む場所であるはずなのに、例え偏差値教育だけとはいえ、AIに指導を委ねるというのは虚しい気がする。しかしこれからの時代に、自分の頭で考え、様々な課題に遭遇し、その対応に悩み、試行錯誤を繰り返すことで、判断の仕方を学び、さらに集団で討議し、意見を他者に伝える経験を繰り返すことで、コミュニケーション力は養われる。子どもたちのこれらの活動を支えながら、傍らにはいつも教師がいる。学校でこのような「二十一世紀型学力」を身に付けた人材を育成できるのは、やはり人間の教師しかいない。

序　章　テクノロジー進化と労働市場変化
第１章　「人間の強み」が不可欠な仕事の条件
第２章　「AI・ロボットの強み」が活かせる仕事
第３章　各エリアの職業とその特徴
第４章　いつまでに何が変わるのか
第５章　消える仕事、生まれる仕事
第６章　仕事をどう選び、シフトするべきか
終　章　10年後、20年後の日本人の雇用

起業教育研究会　企画委員
兵庫県立尼崎稲園高等学校
特任専門官　井上　仁志